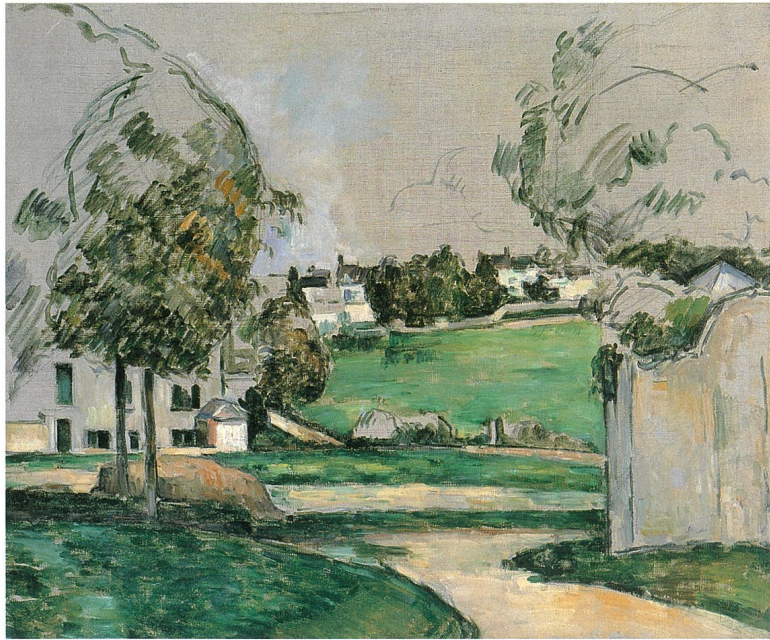


グリーンルーフ

鹿児島市立美術館だより

館藏品誌上ギャラリー㊟



ポール・セザンヌ「北フランスの風景」1885年頃

表紙の作品

ポール・セザンヌ「北フランスの風景」

1885年頃 油彩・キャンバス 45.0×53.0cm

今から20年前の新装開館のとき、西洋美術コレクションが始まったわけだが、最初に購入した記念すべき作品である。遑ればモネ、ピサロ、シスレーにつながり、下ればピカソ、さらにはステラにまで言及できる。また、その日本初の紹介者として郷土作家の有島生馬とも関連付けられるため、当館のコレクションの基点としてきわめてふさわしい作家といえよう。

さて、1936年発行のヴェントゥーリのカatalog・レゾネにない、当館では「1885-87年頃制作の『風景』」として紹介してきていたが、96年発行のリウォルド版レゾネによると「1885年頃、『北フランスの風景』」ということになる。私も有力視していたが、サザビーズの調査によると、セザンヌ家の別荘ジャ・ド・ブッフアン（風の館）の風景ではないらしい。「ラ・ロッシュ・ギュイヨンの曲がり道」という同時期の作品との類似性、画面の緑のおびただしき等、いくつかの理由からバリ郊外北部の風景と推測できるようだ。

なかでも極めつけはレゾネの次のくだりである。「そのスケッチ風の状況はおそらくセザンヌが、ある時はルノアールと一緒に、ある時はラ・ロッシュ・ギュイヨンとメダンの間の様々な場所に、大忙しの滞在を始めていたことを示している」。水彩画などは特にそうだが、セザンヌは意図的な塗り残しが多い。しかしこの作品の塗り残しの多さは、モチーフとじっくり向き合う余裕のない時期だったためと結論づけられている。

ヴェントゥーリの改訂版レゾネでも1885年作とされ、研究家クーパーに至っては1885年夏と限定している。翌86年は、親友ゾラとの絶交、長く連れ添った妻との正式な結婚、さらには父の死亡と激動期を迎えるが、この85年もセザンヌにとって特別な年であった。

先ほどの引用で「大忙しの」という訳をしたが、このhecticという単語には「消耗性の、熱狂的な、紅潮した」という意味もある。実はセザンヌにとって精神的な動揺の時期であった。K・バットはこれを「セザンヌの孤独に対する意味における1885年の愛のエピソード」として特記しているほどだ。リウォルド編集『セザンヌの手紙』をひもとくとこの恋愛譚が垣間見える。この年の春から夏にかけて、謎の女性への恋文に始まり、その返事を求めてゾラに旅先への転送を懇願する神経質な手紙が数本、そして最後に夢破れ孤独を嘆く文面へと続く。

85年説が事実であるならば、この未完成の作品には、画家としての制作上の苦悩と迷いばかりでなく、人間セザンヌの動揺を見出すこともできよう。

鹿児島市立美術館



〒892-0853
鹿児島市城山町4-36 TEL.(099) 224-3400
<http://kagoshima.digital-museum.jp/artmuseum/>